

神戸から明石にかけてひどい渋滞に巻き込まれた典子と阿紀の車は、瀬戸内の島々がシ
ルエットの輪郭を金色に輝かせ始めた夕方、やっと淡路島へのカーフェリーに乗り込めた。
「私にもあつたなあ。胸はずませて恋人に会いに行った日が……」

遠い昔を振り返るように典子が言う。女二人のドライブは互いにかなり突っ込んだ打ち
明け話を披露するまでに親しくなっていた。

「前の晩にわくわくしながらお弁当作ったりして」

「その方が後の旦那さん……?」

「ああいうのも旦那って言うのかしら。ま、旦那には違いないか。早いわねえ、娘が十四
だから、もう十五年も前の話よ」

典子は久しぶりに見る海の夕日に感傷的になっている。

「デートは何処へ?」

「思い出させないでよ」

「もう今のお仕事してらしたんでしょ」

「そう正看護婦に成りたて。患者に献身的な医者は全ての面で聖者だと思っちゃったの
ね。……津坂院長にその話したら、そこまでバカだとは思わなかった、ですって。バカは
自分でも分かっているけど」

阿紀もポットのコーヒーを飲みながら笑った。

「津坂先生、奥様亡くされてお独りなんですって?」

「あれは駄目。あんな堅物知らない。あれこそ大バカのコンコンチキだわ」

「こんないい女が直ぐ側に居るのにねえ」

「そうよ、バカにしくさって。あら、私としたことが、お里が知れるわね」

大鳴門橋を渡る頃には、冬の陽は完全に落ちて、点滅する灯の人工曲線だけが闇に輝い
ていた。

「まるで満艦飾の豪華船みたい」

典子は深呼吸するように大声を出したが、阿紀は耕之輔のことを考えていたので、生返
事を返しただけだった。

「見えないだけで、この下では鳴門の大渦潮が逆巻いてるのよね、私のお腹の中みたい」

「あら、胸の中じゃないの？」

「この年になると、残念だけど、お腹の中なのよ」

徳島の町に入ると、国道は勤め帰りの車で渋滞していた。予約しておいたホテルに着いたのは七時少し前であった。

耕之輔はまだ着いていない。

フロントでチェックインを済ませると、阿紀は典子を食事に誘った。

「有り難う。でも、そうもしてられないの。今直ぐ引き返しても京都に着くのは十一時近くなるのよ」

「泊まって頂くわけにはいかないの？」

「とんでもない。明日は日勤。それに車を院長に返さなきゃならないし……」

どう勧めても、典子はお茶とケーキだけしか頼まない。阿紀と耕之輔のふたりだけの晩餐への配慮に違いない。

「でも、お腹すくわ」

「途中でラーメンでも掻き込むわよ。それとも我慢して、院長に夜食付き合わせて誘惑しちゃおうか」

駐車場で典子の車を見送って、部屋に入ると、疲れがドツと吹き出した。

昨日、京都に着いてからのことが夢のようだ。阿紀は気持ちを立て直して、津坂病院へ

お礼の電話を入れた。

宿直に掛かったらしく、切り替えられてから暫くして津坂が出た。阿紀が引き続いている礼を述べ、典子に食事もさせないで引き取らせたことを詫びると、

「いいのいいの。あんたは耕之輔君のことだけを考えてればいいんだよ」

典子と同じことを言う。

耕之輔はなかなか着かなかった。

何か事故でもあったのではなからうか。急用でも出来たのなら連絡があるはずだ、と時計を見ると、もう八時を二十分も回っている。

昨日から余りに幸せだっただけに、不安とともに、不吉な予感が走る。平安神宮で初子に会ったことも何か運命の予告ではなかったかと気になった。

窓辺に立つと、意外に近く、大きな黒い塊が迫っていた。目が馴れてくると、どうやら城山の茂みらしい。それにしても盛り上がるように迫る大楠の枝々に、霜ふりのように薄白く見える短冊は何だろう。分からないだけに不吉を感じさせる白い群れだ。

電話が鳴ったのは、そんな時だった。

電話はフロントからで「お連れ様がお見えになりました」と言い、代って耕之輔が出た。「今着いた。直ぐに行つていいかな」

こんなに心配させておいて何を呑気なこと言っているの、と思いつつながら、耕之輔の配慮

が嬉しかった。

気がついてみると、着物も荷物もそのままだった。今さら手遅れだと諦めて鏡を見ると、男を待つ女の顔がそこにある。

「あんた、現金過ぎるんじゃない？」

耳を澄ましたがじゆうたんの廊下に足音は無かった。

突然、チャイムが鳴り、返事の前にノブが回った。

「やあ、遅くなって……」

ボストンバッグを下げて入ってきた耕之輔に、阿紀は思わず息を呑んだ。

頬が削げ、鋭い目が落ちて辺りに隈ができ、顔も浅黒く、肌に艶がない。目の底だけが光っている。

「待った？」

声だけが以前の優しい耕之輔だった。阿紀は一瞬声を呑み、後に言葉が続かないままバッグを受け取った。

その肩を耕之輔の鬼手が掴んで引き寄せた。

耕之輔の強い力に任せながら、阿紀の軀は重心を失いそうだった。胸の厚みは以前の耕之輔だった。その懐かしさに酔う前に、阿紀は耕之輔が直面している苦勞の厳しさを思い知らされていた。

「会いたかったッ！」

耕之輔の率直な吐息を耳端に感じながら、阿紀はうかつにも彼の苦勞を何処か遠くに考えていた自分を恥じた。この人はこんなにも苦しんでいたのだ。

ようやく離れると耕之輔が言った。

「食事はまだだね」

「ええ。……お疲れになっっているみたい。ホテルの中で軽く済ませましょう」

「昨夜は寝られなくてね」

耕之輔は遅くなった理由をそんな風に説明した。

ハンカチで耕之輔の唇についた口紅を拭う。

今夜は私の胸の中でゆっくり休ませてあげなければ、と思う。阿紀は、夕暮れ近く、疲れ果てて帰って来た息子を迎える母親の顔になっていた。

私に今来るとすれば何があるのだろう。

エレベーターの中でも、耕之輔は唇を寄せてきた。

阿紀は軽く応えながら、何か焦っている耕之輔を感じていた。この人をここまで追い込んだものは何なのだろう。そんなにも急迫した事態が襲ってきているのだろうか。削げたのは頬だけではなさそうである。心のぜい肉を全て落とした感じだった。必死なものが押し出てくる胸板に出ている。

ふたりは一階のレストランに入った。

「何になさる？」

「僕は軽いものがないな。貴女はお腹空いてるんでしょ、僕に構わずやって下さい」

「私も軽い方が有り難いわ」

結局、二人ともビーフシチューを注文した。

親しい間柄でも、久しぶりでは馴れるのに時間が掛かる。何処か他人行儀で、互いにその距離を計りかねていた。阿紀はせめて今夜だけは深刻な話にならないように気を配りた
い。

「京都では津坂先生に随分お世話になりました。おっしゃる通り素晴らしい方でしたわ」

「……だろ？ 昨夜も遅くに電話を貰ってね、僕にはもったいない人だって言われたよ」

「あら……どなたのことでしょう」

「僕よりは二枚も三枚も上だって」

「私には、耕之輔さんに何でも教わるといい、つておっしゃってたわ」

「テキは狸爺だからな。……僕はここのところ毎晩、電話でお説教されてるんだよ。作陶にしろ、世の中のことにしろ、ふた言目には、甘いつて言われてね。あれはお説教というより洗脳だな。反論しようにも、反論の仕様もない。つくづく自分の甘さを思い知らされる。毎回このころの革命に遭ってるみたいだよ」

「期待していらっしやるからよ」

「有り難いことだけど、出てくる言葉は厳しいからな。君には何と言ったか知らないけど、文字通り罵倒だからね」

あの津坂のことだ、かなりひどいことを口にするに違いない。

かなり時間が掛かって、出てきたシチューにも耕之輔はあまり食欲を示さなかった。

疲れだけではなく、何処か軀が悪いのではあるまいか。阿紀は、その落ちた目の黒い隈に不吉なものを感じていた。しかし、目の底に光るものは以前にも増して透明である。それが唯一の救いだった。

「初子に会ったんだって？」

話の途切れたところで、耕之輔がぼつりと言った。

「平安神宮で会った方？ その方なら、初子さんとおっしゃって頂きたいわ」

「……？」

「私の方が貴方の近くに居るつもりよ」

「もちろんだよ。そうか。そうだよな」

あんな人に耕之輔を任せておくわけにはいかない。今まで、他人を不幸に追い込むことの罪に苛まれてきた分、肩が軽くなっていた。

「一度は、ゆっくり話さなければと思っていたんだ」

「こんな処でお話しになることじゃないわ」

「それはそうだ」

耕之輔はそれほど多くないシチューを半分残した。昼が遅かったから、と耕之輔は言い訳したが、阿紀には尋常なこととは思えなかった。

彼が直面している窯の問題がどんなに大変なことなのか阿紀には見当もつかない。実態を早く知りたいし、彼のためにも聴いてあげたいと思ったが、それより先に今夜は休ませてあげることだった。

「コーヒーを頼もう」

耕之輔が言うのに、阿紀は首を振った。

「今夜はお休みにならなければ……」

「コーヒー飲んだって眠れるさ」

阿紀は同じように首を振って立ち上がった。

何がここまで、彼を苛立たせているのだろうか。もし、それが蝕むものへの自覚だったら直ぐにも対処しなければならぬ。以前の飲み過ぎを考えると肝臓ということが考えられる。そう思ってみると、顔色の悪さが死ぬ前の父に似ていた。

肝硬変は、阿紀には父を奪い去った怖い悪魔である。子供心に植えつけられた恐怖は今もこびりついている。

気のせいかな、食事を済ませて部屋に戻ると、目の力も薄れている気がした。

しかし、喋ることは相変らず情熱の塊である。作陶にかける夢は飛躍しながら刺々しくさえあった。吐き出したい思いの、言葉にならないもどかしさが、時々、渴いた咳になった。

阿紀は返事の代わりに指の先で削げた頬をなぞる。出掛けに剃った跡はそこだけが生きているようにジャリジャリと成長し続けていた。

「津坂院長からふた言目には、志が低い、と言われた。志はもつと高く持たなきゃいかん、現代の作家なんか相手にするな、そんなレベルの問題じゃ駄目だ。高い古人のエネルギーに学べ。……それはよく分かるんだが、そうは言われても、やはり焦るんだ」

「耕之輔さんはもつと出来るのに、自分でこの程度と勝手に決めてるとおっしゃってたわ」「そうなんだ。無器用を盾に逃げている。確かにそうだ。甘えていた、自分に甘えていた……」

「折角の才能を惜しんでらっしゃるのよ」

沈黙が続いていると思ったら、寝息に変わっていた。

耕之輔は浅谷窯の現実については何も口にしなかった。しかし、彼を追い詰めているのは、目の前に迫っているこの問題に違いない。口にしただけにその深刻さが窺える。

鳥ガラのように眠る耕之輔の肩から、そつと手を抜くと感覚がなかった。研ぎ澄まされ

た神経は、眠りの中でも、こよりのように立っているらしく、時々眉間にけいれんを走らせる。交通事故を目の前にして、手の下しようがない残骸に当惑しているのに似ていた。どうすればいいのでしょうか。神さまお教え下さい。

阿紀も疲れていたのだろう。目を醒ますと直ぐ傍に耕之輔の顔があった。頬にキスを受けて目を醒ましたらしかった。

「……？」

昨夜の耕之輔とは別人に見える。

「御免、起こしてしまったな」

「寝られないの？」

「いや、よく寝たよ。習慣なんだな、この時間になると必ず目が醒める」

窓の隙間に白い夜が明けようとしている。時計を見ると五時過ぎだった。

「いつもこんな時間にお起きになるの？」

「うむ、寝る時間が惜しくて仕方ない。やらなければならぬことが有り過ぎる」

「軀を壊したら元も子もないわ」

「大丈夫、僕は軀だけは恵まれてるから……」

言いながら包むように胸の上にのしかかっていた。

「疲れていらつしやるのに……」

そんな阿紀の言葉も厚い胸板に消されていた。

後は阿紀にも覚えがない。何処にこんな力が残っていたのか、耕之輔の力に翻弄されながら、阿紀には不思議でならなかった。何がどうなっているのか分からない中で、悦びと充実だけが阿紀を満たした。耕之輔に無理をさせてはいけないという理性など何の役に立たない陶醉の時間だった。

阿紀が再び目を醒ました時、視野の端に入った受話器に赤いランプがついていた。

赤いランプはフロントからのメッセージである。

耕之輔はまだよく眠っていた。

それにしても何のメッセージだろう。耕之輔に急用でも出来たのか。

時計を見ると九時を大きく回っている。今度はこんな時間まで寝ていた恥ずかしさに身が縮んだ。

幸いフロントは空いていた。

「済みません。メッセージが入っていたのですけど」

阿紀がキイを見せると、フロントの若い男は事務的な声で告げた。

「お客さまがお待ちです」

「お客さま……？」

「そちらのコーヒーハウスにいらっしやいます」

ガラス越しに女性の肩が見えた。

入っていくと、女の方で振り返った。見た顔だった。

「お忘れですか。浅谷窯でお会いしました……」

「ああ、あの時の……たしか」

「……服部久美子と申します。……お義兄さんは？」

「今、お起こしして参ります」

「いえ、いいの。却ってよかったわ。先に貴女と二人だけでお話出来たらと思ってきましたの。……どうぞ、お掛けになって下さい」

「何か急用でも？」

阿紀は向かい合って座りながら訊いた。

「いいえ、お義兄さんが心配になって来ましたの」

「やっぱり……お軀お悪いのね」

法廷で判決を聴く被告のように阿紀は思わず身構えていた。

「お義兄さん、ひどく疲れてたでしょ？　このところものけに憑かれたように、尋常じゃないんです。ロクに寝ないし、仕事場に入りびたりで食事もすすまないし……一昨日も一睡もしていないの。それでここまで車運転してくるって言うんですもの、私たち反対

したんです。清水さんが運転するからって支度していたら、お義兄さん、一寸した隙に置き手紙して出てしまったの。あれじゃきつと事故を起こすに違いないって。清水さんも行った方がいいって言うものですから……。……貴女のこととなるとお義兄さんもう目が無いんです」

「昨夜お会いした時はびっくりしました。顔色は良くないし、随分お痩せになってたし、何か悪い病気ではないかと心配しましたの」

「あれでは病気にもなるわ。灯が消えてやっとなんだからとこちらもその気になって、お風呂を使ったりして寝ようとすると、又仕事場に灯が点いてるんです。焦る気持ちも分からないじゃありませんけど……」

「じゃ、お軀が悪いわけじゃ」

「……だと思えます。あれだけやれば誰でも変になります」

「教えて下さい。一番何に焦っていらっしやるんでしょう」

阿紀は哀願するように上半身を乗り出していた。

「何と言つても、お義兄さんを一番焦らせてるのは貴女ですわ。今、貴女に去られでもしたら、お義兄さんどうにかなくなってしまいます」

阿紀には何とも返事が出来ない。

「御安心下さい。私は貴女の味方のつもりよ。今のお義兄さんにとって貴女はそれだけ掛け替えのない人なんです」

「でも、それは……」

「直接にはもつと悪い人がいるの。お分かりでしょ、京都の津坂先生。私はお会いしたことはありませんけど、お義兄さん、あの先生にひどく感化されて、何か神経が立つというか、あの先生から電話があると、目の色が変わるんです。かなり強いこともおっしやるらしいんだけど、その度にお義兄さん、こんなことはしてはもられない、というか、焦りになっているんじゃないかしら。勿論これは私の想像ですけど」

「じゃ、浅谷窯の問題はそれほど切迫しているわけじゃないのですね」

「浅谷窯は清水さんが引き継ぐことで話し合いがつかっています。私のこともお聞きなんですよ？」

「ええ、聞いてます。おめでとうございます」

「……有り難う。清水さんと私が残っている以上、お義兄さんに不利なことはさせませんわ。結婚なさったらお義姉さんも含めてよ」

久美子にお義姉さんと呼ばれて阿紀はうろたえる。それは嬉しくもありこそばゆくもある響きだったが、それ以上に久美子が初子の妹であることに阿紀はまだこだわっていた。久美子はその阿紀の戸惑いを見て取ってつけ加えた。

「誤解の無いように言っておきますけど、私、姉のことは今までも恥ずかしく思ってきました。姉だけでなく父や母に対しても同じです。お義兄さんにはとても済まない気がしています。特に今回の姉の不祥事は、本当に恥ずかしく思います」

「貴女がお調べになったとか聞きましたけど」

「ええ。私が出来ることって、それくらいしかありませんもの。以前から私、薄々感じていたんです。それに、私は父の弱みも握っていますの。そんなことしたくなかったけど、仕方ないでしょ。放っておけばお義兄さん、とんでもない落とし穴にはまり兼ねないんですもの。悪い女でしょ、自分でもこれほどのワルだとは思わなかったわ」

一気に喋る久美子の奥にあるものを阿紀も見逃すわけがなかった。それは浅谷窯を訪ねた時に既に感じていたことである。

「私、有り難う、と言うべきなんでしょうね」

「勿論よ。一番感謝して頂きたいのはお義姉さんだわ。第一、私がこんなにワルでなかったら、今頃お義姉さんもっと苦労してらっしゃるわよ」

余りに開けっ広げな久美子に阿紀も正直にならないわけにはいかない。

「有り難う」

素直に頭を下げると、久美子も笑顔でうなずいた。

「お義姉さんて、私の思った通りの方だったわ。無理してもきて本当に良かった」

「私もお話出来て良かったわ。本音を言うと、ちよっぴり怖かったの、ライバルじゃないかって」

「ライバルよ。だって清水さんもお義姉さんのこと、それは褒めるんですもの」

「萩へ連れて行って頂いて随分お世話になりました。よろしくおっしゃってね」
「言わない」

ふとガラス越しに表を見ると、堀を隔てた城跡に大きな楠が南の太陽に明るくのしかかっている。昨夜、ひとり見た白い短冊のような物は枝に群れる鷺だと分かった。

そこへ耕之輔が入ってきた。思わぬ久美子の姿に驚いている。阿紀の横に座りながら、
「一体どういことなんだ」

「どういことじゃないわ。勝手に車を持ち出して、お義兄さんを逮捕に来たのよ」

「それで何時着いた？ ……車で来たのか？」

「そうよ、あのガラクタ軽四輪で高速走るのちよっぴと恥ずかしかったけど」

「あきれた娘だ」

「どっちがあきれた人ですか。清水だってどれだけ心配したか知れないのよ」

清水さんがいつか清水に変わっている。

「車一台くらいにクヨクヨする様じゃ清水も大成はしないな。 ……あ、紹介しとこう」

「もうそんな必要ないの。私たち同盟結んだんですものね。女がつるむと怖いわよ」

耕之輔は朝の定食を頼んだ。

「ちよっぴとお義兄さん、私たちも食事は未だなのよ」

「あ、そうか。御免御免」

今朝の耕之輔は頬こそ削げているものの、顔色は悪くない。阿紀はそれだけで満足だった。浅谷窯の問題も久美子の話では案じた程ではなさそうだ。

「清水に電話してきます」

久美子が去ると、耕之輔は阿紀の手を握ってきた。

「心配したよ。目を醒ましたら居ないんだもの」

子供のような耕之輔を阿紀は可愛いと思う。

阿紀は徳島に来てから未だ耕之輔と肝心なことは何も話していない気がしていた。

「今日はという御予定？」

「君に会いに来たんだ。君の予定に合わせる」

「それよりあの方はどういう御予定なんでしょう、久美子さんは？」

「勝手に来たんだ、勝手にするだろう」

「冷たいのね。随分心配なさったみたいよ」

「奴ら、僕がここに来るのを反対したんだよ。途中で必ず事故を起こすというんだ。清水が運転してやると言うんだが、奴だって忙しいのは分かっている。それに二人が会うのに邪

魔されなくなかったしね」

「本当に怪我でもなさったらどうするの、取り返しのつかないことよ」

「少々寝てないからってそんなへマはやらないさ。皆して余計な心配ばかりしてるんだ」

「何が余計な心配……？」

電話から久美子が戻ってきていた。

「散々心配させといてよく言うわ。この間も言ったでしょ。今のお義兄さんは尋常じゃないのよ」

「勝手にそう決めてるだけさ。俺はこの通り……」

「それが尋常でない証拠よ。人間だって動物なんだから、食べることも必要なら、睡眠も必要なの。お義姉さん、聞いて下さい。どれだけ仕事場に居ると思います？ 一日、二十時間ですよ。それも二日や三日じゃないんです。それにお昼のおにぎりだって二つと食べないで……」

「まあ……！」

阿紀の初めて聞く話だった。

「ここまで倒れないで来れたのが不思議なくらいよ。人間命あつてのもの種って言うですよ」

「おっしゃる通りだわ」

「私、京都の先生恨んでるの。余計なことおっしゃるものだから……殺す気かって言うてやりたい」

「余計なことじゃないさ。創るということはどういうことか、を教えて下さったんだ」

耕之輔も向きになって反論する。それでも定食の膳が運ばれると、耕之輔は武者ぶりつく様にして食べた。

「お義兄さん、現金過ぎない？ 私の言ったことみんな嘘みたいじゃない。お義姉さんに会って、ゼンマイが解けてしまったんだわ」

久美子が旨いことを言った。阿紀にも、それがよく分かった。仕事への打ち込みから、緊張の極に達していた鋼のバネが、限界に来て一気に解けたと思えない。それにしても、一日二十時間、仕事場にいるとは異常としか言いようがない。

「でも良かったわ、こんなに食べられて」

阿紀もほっとして自分の箸を割った。

「久美子さん、ゆっくりなさっていいいでしょ」

「そうゆっくりもしてもらえないの。今電話したら、支払いのことで伝票が分からないで困ってるの」

「何とかならない？ 折角いらっしやっただのに鳴門の渦潮くらいご覧になって帰らないと……」

「そうね、道筋だから帰りに見て行くわ」

ふと見ると、耕之輔は額一杯に汗の玉を浮かせている。それほど暑いわけでもなかった。阿紀はハンカチを貸しながら、やはり普通ではないと思った。拭く傍から新たな汗が吹き出ている。

「女ふたりで行きましようか、鳴門の観潮？ あなたはもう少しお休みになってた方がいいわ」

「冷たいことを言うなあ」

窪んだ耕之輔の目に光がなかった。お腹が膨らんだせいで眠気がさしてきたらしい。阿紀は甘えるように言った。

「ね、久美子さんの車で連れてって」

「ええ、いいわよ。ではそういうことにしましょう」

久美子も阿紀の思惑を察して同調した。耕之輔も強いて反対はしない。

「勝手にしろ、全く余計者が現われやがって」

言いながら、もう半分目が閉じかかっている。

結局、耕之輔が乗ってきた車を使うことになり、耕之輔は部屋へ引き揚げた。

フロントで道を教わり、国道に出ても、女ふたりは殆ど喋らなかった。

「分かったでしょ。もう限界ギリギリなのよ」

「そうね」

「でも、これで元気になるわ、きっと」

久美子の言葉に、阿紀は不覚にも泣き出していた。止めようとしても止まらぬ涙は堰を切って流れ出し、むせびはしゃくり上げに変わっていった。悲しいのか嬉しいのか分からない。切なく熱いもので溢れていた。

「……お義姉さん、頼みますね」

久美子の声も濡れていた。

この娘の中に流れる複雑なものを阿紀はしかとは見定められなかった。耕之輔に好意以上のものを持っていることは確かだが、何処か爽やかでしなやかなものが感じられる。

清水との婚約も、別に耕之輔を諦めてというのでもなさそうだ。耕之輔を姉の夫として知ったため最初から念頭になかったのかも知れない。人生の師として尊敬し慕っている面も感じられる。耕之輔を見る目には殉教者を見る信者の畏敬のようなものがあつた。

「清水さんを見てても思うんだけど、本当に生きてる男の人には、女ではとてもかなわないところがあるわ。お義兄さんの、あの仕事への打ち込み方、私たちにはとても真似出来ないもの。お義兄さんの場合は特に桁はずれかも知れないけど」

「そうね、生まれてきた以上は遣るだけのことは、身が砕けても遣るんだってところがあるわね。とても真似出来ないというか」

「そうでもない男も沢山いるけどね」

鳴門へは北へ真っ直ぐの一本道だった。一度、街への入り口を間違えたが、大鳴門橋は意外に近かった。車を鳴門公園の駐車場に置くと、ふたりは坂道を下っていった。見上げる橋は巨大だが、大自然の中では小さな曲線でしかない。

ふたりは途中のベンチに掛けて休んだ。眼下の海峡は処々で蒼く盛り上がり、そこだけがツルリとした円を描いている。その一方で白く歯を剥いているように見えるのが渦潮らしかった。観潮船が玩具のように弄ばれている。風は殆ど無かった。

阿紀は久美子から、浅谷窯のことを聞いておきたいと思った。耕之輔の置かれた立場が分からないと意見もアドバイスも出来ない。ひいては阿紀自身どう動いていいかも分からない。久美子は暫く考えていたが、

「……それには私の家の恥からお話ししなければ分かって貰えないわね」

と服部家の拝金主義の考え方、先代時代からの援助や、初子と耕之輔の夫婦にまつわる問題まで、こと細かに話してくれた。

「でも私たちは違うのよ。清水さんが浅谷窯を継ぐのも、言ってみればお義兄さんに時間稼ぎをして貰うためのもの。私の口から言うのもなにけど、清水さんは、それはお義兄さんのこと尊敬してるし、何が御恩に報いることか知っている人よ。それに私の強みは父の弱みを握っていること。清水さんと私がついている以上、お義兄さんに悪いことは決してさ

せないわ。お義姉さんも安心してお嫁にいらっしやい」

お嫁と言われて、阿紀は顔を赤らめる。

海岸に下りて行くと今日の満潮、干潮の時間が書き出してあった。今は潮を観るにはいい時間ではなさそうだ。

久美子が時計と見比べながら言った。

「お義兄さん、まだ寝てるかしら」

「夕方まで寝てるんじゃないかしら。寝て貰わないと困るけど」

ふたりにとつて今は渦潮より耕之輔であった。

淡路島が鮮明になっていた。何時か風が出始めた。南国とは言え、冬の潮風は冷たい。駐車場に引き返して車に乗り込むと、もう昼だった。

「途中何処かでお昼食べましょう。久美子さんお若いからお腹空いてるんじゃない？」

「私、軀が大きいから、いつも大食漢に見られてしまうの。これでも結構おしとやかなのよ」

「おしとやかだってお腹は空くわ」

帰路は道も空いていて快適だった。

今頃耕之輔は正体もなく寝ているだろう。寝ていて欲しいと思う。

「お義姉さん、ずるいわ」

信号で止った時、久美子が突然言い出した。

「私にばかり話させて、私、お義姉さんのこと何も知らない」

「私の何が知りたい？」

阿紀は悪戯っぽく訊き返す。

「みんなよ。お義姉さんのお仕事も、今までのお義姉さんのことみんな……」

「あらあら、恐い話になってきたわね」

「一つだけ訊いていい？」

「どうぞ。……何でしょう？」

「お義姉さんに山口に来て頂くとしたら、取り敢えずどういう障害があるのかしら？」

「別に、私の方には何も……ただ、貴女のお姉様の問題があるでしょ」

「それは時間の問題。心配なさることないわ。……お仕事の面ではどうなの？ そう言え

ばお仕事のことだって、お義姉さんに紬を一枚見せて貰っただけよ」

「浅谷窯に着て行ったあれ？」

「あ、そうか。じゃ二つ見てるんだわ私」

「あの人が私の紬をお持ちだっていうの？」

「あら、知らないの？ お義姉さん、京都で買ったとか言ってたけど……」

「本当に？ 知らなかった。何にもおっしやらないんだから……そうなの」

確かに京都の「吉竹」に自分の展覧会に出した作品があることは言った覚えがある。

「だって、私が思っている物だとすると、女物よ」

「そうよ。明るい茶色だったわ」

「そう、代赭色というの。やっぱりあれだわ。あれを、お買いになってるの？」

「みたいよ。……それもね、いい物見せてやろうかって、それはもったいぶってやっと思

せて貰ったの」

「そうなの。問屋に渡ると安くはないのよ」

「お義姉さんには安い買い物だったんじゃないかしら。傍らにお義姉さんのもの置けるん

ですもの」

阿紀は黙ってしまった。又新しい発見だった。それを代弁するように久美子が言った。

「……お義兄さんらしいわ。私なら得意になって、イの一番に言っちゃうとこだけけど」

途中で食べるつもりは昼食は、結局ホテルへ帰って、近くでうどんでもということになった。

「お部屋、確かめてくるわね」

阿紀だけが見に行くと、まだ扉に「起こさないで下さい」の札は掛かったままだった。

阿紀はほっとし、祈る気持ちで引き返す。ロビーに久美子の姿がなかった。待っていると、電話コーナーから現われた。

「……清水さん？」

「私の運転信用してないの。心配だから寝ないで待ってるですって。どうぞ御勝手について言っといた」

「御馳走さま！」

「あら、そんなんじゃないわよ」

蕎麦屋は直ぐに見付かった。

久美子は昼を済ませると直ぐに発たなければならぬという。

「悪いわね。折角心配して来て頂きながら……お見送りもしないなんて」

「きつとスッキリした顔で起きてくるわよ。そしてこう言うの。やっとあの邪魔者、退散したか、って」

冗談にしながら、久美子の瞳にはやはり寂しきは隠せなかった。

「お義兄さん、ゆっくり疲れを取って帰らせてね」

「ええ、約束するわ」

阿紀も真面目にうなづく。

「悪いけど久美子さん、着いたらどんな時間でもいいから電話してね」

「あら、お義姉さんも私の運転信用してないんだ」

久美子は軽四輪の窓から大きく手を振って駐車場を出て行った。

ロビーに引き返すと昼下りのロビーに人影は無かった。ムード音楽だけが阿紀のために流れているようだった。何だか深海にいる気分だ。

人を恋するのは、相手の渦に身を任せることなのだろうか。任せて悔いがない思いと、他に道のない開き直りが快かった。しかし、その先に何が見えているわけでもない。

「坂戸様ですね」

気がつくくと、フロントの女性が傍に立っていた。

「お帰りになったらお部屋に知らせるようにとのことでした」

「電話がありましたの？ ……何時です？」

「先程です」

「どうも有り難う」

耕之輔はもう着替えて、髭を剃っているところだった。

髭を剃った耕之輔は顔色も明るく見えた。笑うと子供のようだ。

「さあ、これで君の運転手として恥ずかしくくないだろ」

鏡の中の耕之輔がタオルで顔を拭いながら笑って言った。

「何おっしゃってるの。そんな言い方しないで」

「だってその通りなもの」

「私ひとりで行ってもいいのよ」

「そのためにやって来たんじゃないか。何処へでもお供するさ」

阿紀はその背中に額を押し付ける。

「……幸せよ。こんなに嬉しい時間を持てるなんて思ってもみなかったわ」

それは事実である。この秋、耕之輔を萩に訪ねるまで考えてもみなかった充実がそこにはあった。この満ちてくるものを表現するのはとても言葉などでは不可能だ。だからこうやって抱き着くのよ、と自分に言い訳しながら阿紀はそれでもまだまだ足りないと思う。身震いするとはこういう時を言うのだろう。

自分の満足度によって確かめてきたものが、人の幸せの中に埋没することの悦びに変わるとしている。今、この人の為に染め、この人の為に織ったら世界中探しても誰にも負けない物が出来そう。そんな力が自分の中に信じられる。

「お食事まだでしょ」

「寝ていたからまだお腹は空かないよ。何処から回るんだ？」

「紹介して下さることになってる染屋さんに、まず行きたいんですけど」

阿紀はその所番地のメモを見せた。

「よし、まずこの町の地図を手に入れよう。これは運転手の仕事だ」

「じゃ、染屋さんに御都合伺ってみるわ」

「じゃその間に地図を探してくる」

言うなり耕之輔は部屋を出て行った。

染屋は「いつでもどうぞ」と言ってくれた。

藍染の行程は分業になっている。まず、藍タデを畑で栽培する人たちを藍屋という。ここで育てた藍タデは刈り取られ、その葉は屋内で発酵されて葉すくもに仕立て上げられる。その出来上がりを「藍玉」と呼び、かます吠に詰めて染屋に引き取られる。

染屋ではこの藍玉を大瓶に入れ、水、酒、石灰などを加えながら染め液に育てていくのである。これが「藍建」と呼ばれる作業だ。

阿紀は小千谷の家に瓶を埋めて「藍建」をして藍染をしているが、全てを染めるだけの藍はとても建てられない。阿波の大手の染屋と契約して藍の糸を買ったり、特注して染めて貰うこともある。今回もその染屋に藍屋を紹介して貰うのだ。

耕之輔が売店から求めてきた市街地図によると、染屋は眉山の裏側に当たっていた。

「フロントの話ではこの辺りは染織業者が多いらしいね。その中でもこの八代染織は大手だから行けば直ぐに分かるだろうと言う話だ」

阿紀は小千谷から直接ホテル宛てに送らせておいた越後の酒を抱くようにして耕之輔の隣に乗り込んだ。

こうして並ぶと、長門湯本から山口市へ抜けたドライブが思い出される。中国山地の茂みで初めて抱かれた日が昨日のここのようによみがえる。

平野の長い橋を渡ると目的の八代染織は直ぐに分かった。狭い道を挟んで、木造の建物が並ぶ。染屋というより工場だった。

道の突き当たりは川らしく土手になっている。耕之輔は少し行き過ぎて止めた。

「どうします？ 挨拶してくるだけですけど」

「ここで待つてるよ」

「じゃ、十分かな。長くて十五分……」

「時間は気にしないでいいよ」

事務所を訪ねると、いつも電話で話している主人が眼鏡を上げながら迎えてくれた。

「直ぐに分かりましたか」

「はい。地図を買いましたので」

「タクシーでしょ」

「いえ、知り合いの車で来ましたの」

「えッ、車でおいになつたんですか？」

阿紀は耕之輔のことをどう説明すればいいのか困った。プライベートなことまで話す親しさではない。

「知っている方と合流しまして」

「じゃ、表でお待ちなんですか。どうぞ入って貰って下さい。どうぞ」

再度促されて阿紀が表に出て行くと、耕之輔の姿は車になかった。

「……？」

見ると突き当たりの土手の上に大きく背のびをしている男がいる。その後ろに冬の高く青い空があった。

あの人が生涯寄り添っていく人だ。そんな感慨が胸を貫く空だった。

呼ぼうとして呼び方がなかった。

「あ、な、たーッ！」

阿紀の声は思ったより大きかった。声は耕之輔を越えて澄んだ冬の空へ走り、散って行く。

土手の上で振り向いた大きな男は阿紀を見下ろして、上がっただけで、と手招きしている。阿紀は、違うのよ、と手を振った。

土手の枯れ草の急斜面を耕之輔は一気に駆けおりてきた。その巨体が勢い余って待ち構える阿紀にぶつかってくる。それを正面に受け止めて、よろけながら、阿紀は満ち足りていた。

「痛いッ！」

「ごめん、ごめんッ」

二人は抱き合う形になって笑う。

急に道幅が狭くなったと思ったら、左右に畑や空き地が目立ってきた。目的の藍屋は応神町という処だ。その町に入っていながら目的の家はなかなかに分らない。訊く人もいない静けさで、畑の中に点在する家が同じように冬日の影を引いている。同じような道を回って、やっと見つけた雑貨屋で訊くと、村道から更に奥深く入った畑の中の一軒家だった。

外見は全くの農家で、そう言えばそれらしい倉造りの建物が庭を隔てて建っている。庭に車を乗り入れると、数羽の鶏が逃げまどうのどかさだった。

八代染織から電話が入っていたらしく日当たりのいい縁側に座蒲団が並べてあった。

主人は六十才になるかと思われる小太りの白髪頭で、いかにも純朴な農民に見えた。

「今年のうちの藍はね、少し硬いんです。反応が鈍いというか、その代わり神経過敏でない分強いです」

主人はお茶をすすめると、藍の性格の説明を始めた。

藍は生き物である。それぞれに癖があり、その年の出来ぐあいも違ってくる。その点、藍を買うのは子供を貰ってくるのに似ている。下手な建て方をすると死んでしまう。死なないまでも病気をさせ弱い子にしてしまう。弱い藍では輝きが出ない。透明感もなくなる。阿紀はノートをとりながら、弱ってきた時の手当法などを細かく訊いた。

耕之輔は側で黙って聞いていた。

「菜はあの倉で仕立てられるんですね」

「ええ、今は何もありませんが、御覧になりますか」

「拝見出来れば有り難いです」

三月上旬、大安の日を選んで蒔かれた藍タデの種は、苗床で間引きされながら育ち、五月上旬畑に定植され七月下旬から八月上旬にかけて刈り取られ、藍倉の中に積み上げられる。水を掛けながら何度も切り返しを繰り返しながら菜に仕立て上げられていくのである。水を掛けて醗酵を管理する者を「水師」といい、水師の腕が出来を大きく左右する。これを「寝せ込み」といい、切り返しは二十回に及ぶという。

こうして百日を経て醗酵した菜は、秋に入ると蒲団を着せられ保温しながら乾燥されていくのである。

倉に入ると、冷んやりした空気と共に、今は吠に収められた藍玉が隅に積み上げられているだけで、文字通りガラシとしていた。兵どもが夢の跡つとものあとといった風情で、壁に掛かっている熊手や柄杓類が戦の後を物語っていた。すべての道具が擦り切れんばかりに減っていた。

「これがお宅へ送る奴ですよ」

主人が積まれた吠を叩きながら阿紀に言った。

「何回くらい切り返されたんでしょう」

「二十五回です」

自信に満ちた声だった。これ以上ないと言いたげだ。

耕之輔は相変らず独特な匂いの残った倉の片隅で、まだ熱心に壁の用具を入口の光に透かして見ている。

「参りましょうか」

阿紀が遠くから声を掛けると、耕之輔は初めて我に返ったように振り向いた。

「旦那は変なものに興味があるようだね」

「やはり、物を作る人ですから」

阿紀も誇らしく言った。耕之輔がやって来て主人に尋ねた。

「随分使い込んだ道具みたいだけど、あれで何年ぐらい使った物ですか？」

「なに、三年ももてばいい方だよ。千貫の山を二十回も返すから直ぐにチビてしまうんだ。体に馴染んできた頃には駄目になる。あれが悔しいね」

「畑の土を耕すように積み替えていくわけですね」

「藍作りは発酵した自分の温度で蒸してやるようなものでね。熱くなり過ぎると自分で自分を灼いてしまう。乾燥し過ぎても駄目、湿り過ぎても駄目、その調節が秘伝だね」

「触覚で健康状態を確かめるとか聞きましたけど」

阿紀が訊くと主人は、そんな簡単なものじゃないと言わんばかりに口を曲げて笑った。

「本にはそんな風を書いてあるね。……五感全部だよ。勿論、口を含むし、噛んでもみるし……。一番当てにならないのは頭だね。人間の考えることなんてたかが知れてる。まして頭は欲と手を繋ぎたがるからね」

倉から出ると外はまばゆい程に明るく感じる。

「ま、子供と思つて可愛がつてやっておくれ。瓶の様子がおかしくなったら早めに知らせてくれれば何とかする……」

「お願い致します」

車に乗り込むと、庭半分はもう屋根の蔭になっている。

車は国道に向かって東に走った。

「あの藍、うまく育つといいな」

耕之輔がポツリと独り言のように言った。

「ええ、丈夫な子に育てなきゃ」

阿紀は瓶の中に育った藍の花を想像しながら答える。

送られてきた藍玉は熱湯で練り合わせ一晩置いた上、四つの瓶の底に分けられ、灰汁を加えて増やしていく。今回は楓の木灰を使う予定だった。フスマや消石灰を加えて温度を調節しながら次第に増やし、瓶の九分通りまで満たしていくのである。

そんな藍建の工程を阿紀は説明した。

「それでも、藍の花が咲くまでは何とか育てられると思うの。問題はその後管理……」

「藍の花が咲くというのは？」

「藍を建て始めて二週間近く経つと、藍液の表面に紫金色の膜というか、小さな泡の塊が盛り上がってきますの。それを藍の花と言うんですけど、攪拌すると藍液は黄土色になっていて、そうやっていたらもう染められる状態なんです」

「藍が生き物だというのは聞いていたけど、こんなに貴重なものだとは知らなかった」

「勿論、今のことから化学染料で染めることも出来ますけど、でも何処か違うんです。

味というか、蒸留水と渓谷の水の違いみたい……」

「分かるよ。その点、陶器も一緒だな。品位がまるで違ってくる」

「先刻、道具を見てらしたでしょ」

「ああ、見事に使いこなした道具だった。あそこまでいくと芸術品だな。労働の中から自然に出来たし、なりがなんとも言えない。本当に腕の一部なんだろうな」

国道に出ると車は夕日に向かって走った。シルエットの眉山も今はその輪郭だけが光背を背負って輝いている。

帰り道は意外に近かった。ホテルの駐車場に車を入れてエンジンを切ると、耕之輔が又ポツリと言った。

「今日の藍玉、僕の処に迎えたかった……」

フロントで阿波の郷土料理の店を教わり、予約して貰うと、耕之輔がコーヒを飲みたいたと言うのでレストランに行った。城跡の見える窓辺に席を取って向かい合くと、耕之輔の顔は以前の元気さを取り戻していた。その耕之輔が阿紀を覗くようにして訊いた。

「どうしたの？」

「ううん、お顔見ているだけよ」

顔を見ているだけで、こんなに幸せを感じるなど耕之輔に会うまで考えてもみなかったことだった。生きている充実とでもいうのだろうか。溜め息が出そうだ。

「こんな幸せが何時まで続くのかと思うと怖くなることがあるの。これでいいのかって」

「人間、先のことを考えると切りがないさ」

「そうね、考えないことにする……」

考えないで済めばどんなに楽かと思う。考えまいとすることは考えることの裏返しだった。運ばれてきたコーヒを耕之輔は旨そうにすすった。

「そんなに美味しいの？」

「うん、軀が要求するというのか、何とも言えないね。酒を止めてからますます旨くなってきた」

阿紀はカップを取り上げて口を付けてみる。阿紀には苦いばかりだった。

「これが美味しいの？」

「僕がジュースの味が分からないのと一緒にだな」

「色んな銘柄があるんでしょ。教えて貰っておかないや。何とというのが一番お好きなの？」

「ブラジルかな、いやモカもキリマンジャロもいいな。要するにその程度ってことさ」